俳句日記　2010-2012

池窪弘務

奈良に住みだしてから四十余年。毎年梅は律義に咲いてくれる。

ホームに戻る

2010年　ホームに戻る

四国遍路と南紀行、そして俳句俟行。俟行の場は「鴻風俳句教室」。鴻風先生には本当にお世話になりました。劣等生のまま今は休学中です。

十月

四国遍路

生きてゐる一歩が嬉し秋遍路

遍路道薄明かりに咲く萩の花

妻の突く梵鐘の音秋の空

十二月

夫婦で南紀を旅しました。するすると『一期一会の女』という小説が出来ました。よかったら読んで下さい。

南紀行

大門坂夫婦杉より冬古道

冬日暮れ佛となりし橋杭岩

冬うらら無量寺の龍虎に会ひに行く

今朝も打つインスリン注射の針寒し

寄せ鍋をつつく夫婦といふ単位

2011年　ホームに戻る

二月

水仙にほほえみかける石仏　　奈良・般若寺

低血糖で救急車で運ばれる。もう一度教育入院しなさいと言うことで。入院中は俳句一句

のみ。

季節なき病窓に降る牡丹雪

三月

春浅し御仏守る十二神　新薬師寺

火の粉舞ふ漆黒の宇宙(そら)　二月堂　**修二会**

奈良坂は京の春へと続く道　奈良坂（般若寺）

義姉(あね)の墓一輪挿せり桃の花

春風がシャッター街を通り抜け

春風に鳳凰羽ばたく平等院　宇治平等院

菜の花や今は昔の通勤路

五月

山深き天空に咲く桐の花　高野山からの帰路

車窓から

六月

短夜に行き先のない列車待つ

梅雨晴れや六十半ばの初舞台　妻の詩吟の発

表会

七月

七夕や星なき空に雲の船

ご褒美に糖質0のビール飲む

九月

フェルメール秋の京都に舞ひ降りる　京都市美術館「フェルメールからのラブレター展」

十月

鹿の目に運慶見ゆる北円堂　興福寺

コスモスを一輪供ふ辻地蔵

鳥居抜けまた鳥居抜け深む秋　三輪神社

十一月

秋深し深夜に停まる救急車

十二月

冬の蚊を打たずに空に遊ばせり

影一つ枯れ木に止まる烏かな

冬の日に朝日を受けて鷺立てり

月消ゆ冬の宴を孫と見る　皆既月食

柚子浮かべ子供に帰る湯舟かな　冬至

2012年　ホームに戻る

瀬戸内海の塩飽列島の丸亀広島。妻の父の古里の島である。

一月

元日や家族葬とて案内なし

凍る朝神戸の地震（なゐ）が蘇る

二月

T君を見舞う。T君は一回り年下の後輩で、あっという間に私と同じ職位に昇級した優秀な薬剤師だった。五十才前に薬剤部長になった。性格は温厚篤実で家族を愛する男だった。私と気が合い、彼の結婚前はよく飲みに行った。結婚後は家族オンリーになった。愛すべき男だった。そのT君が明日をも知れぬ身だという。定年後は職場と関わりを絶っていた私は知らなかった。三十七年間通った通勤路をロボットのように歩いた。会わなければ後悔するだろう。ただ、ただ、歩いた。会いたくないとも思った。彼は涙を流して喜んでくれた。来てよかった。

数ヶ月後T君は逝った。

友見舞ふ通勤の道風寒し

三月

早春の風になりたき子供たち

辿り来る春と老いとの鬼ごつこ

住む人の絶えに庭の椿咲く

人の世はあつと言ふ間の彼岸かな　神呪寺・納骨堂にて

老い呆けて土筆誰の子忘れけり

四月

丸亀・広島

春風の漕ぐぶらんこや過疎の島

過疎の島崩れ壁に春の雨

春の海波の音だけ繰り返す

野仏を辿る小島の春辿礼

雛守る島の威嚇や春の道

風光る大和三山芽吹きかな

五月

風薫る鎮守の森に老婆消ゆ

トワイライト北海道旅行

夕暮れの窓に流るる穂麦かな

北の地で出会ひし桜五月尽

何かゐる水紋上がる植田かな

一日をかくありたしと日日草

紫陽花に薄ら日の差し雨上がる

七月

雷神の住処あるらし雲の峰

縁側で西瓜の種を孫と吹く

禁断のアイスを舌に転がして　糖尿病の私

九月

団塊のどつとひしめく敬老の日

孫の手にいつの間にか猫じゃらし

十月

節電に解き放たれて秋の風

鵜は小首かしげて何思ふ

振り向けば梵鐘浮かぶ秋の空

稲穂波少女の自転車駆け抜けり

曼珠沙華父のおはぐろを口づさむ

秋日射す補厳寺の門に世阿弥舞ふ　補厳寺

真っ白な雲に乗りたし秋の空

秋風や石碑一つの城の跡　十市城跡

秋深し阿修羅見つめる浄土かな　興福寺

我もまた勲章欲しき文化の日

十一月

興福寺北円堂

さあ一歩世親の足に冬日さす

そつと出す無着の足に冬日さす

冬日漏れ運慶見ゆる北円堂

孫、明日香の七五三。春日大社

石段を踊り歩くよ七五三

今日こそは私の天下七五三

冬の夜母の句集をさがしけり

十二月

レオポンの淋しき瞳冬の月

アインシュタイン空間曲がる冬の空

月凍る大気の底は静まれり

冬うらら選ぶ人なき選挙かな

クリスマス妻と二人の忘年会

戻る

レオポンは雄のヒョウ（レオパード）と雌のライオンとの種間雑種。1959年（昭和34）、日本ではじめて生まれました。あの頃はヒーローでした。胸を躍らせて阪神パークに見に行きました。豹の俊敏性とライオンの強さをかね持った野生の王者。それに科学の夢がプラスされていました。やがて、倫理的な問題を提起され、忘れられていきました。自然界には存在しない彼らが一代限りだったのも哀れです。最もやんちゃだったジョニーは神戸にいました。最後の八年は一頭で過ごしました。そして、二十四才で死にました。今は、剥製になり神戸の「りぞ鳴尾浜」でひっそりと公開されているそうです。義母の家の近くです。見たいと思います。写真のジョニーは何を見ているのでしょう。いるはずもない獲物や敵を睨んでいます。でも、瞳には怒りも、欲望もありません。透き通った諦観とプライドがあるだけです。胸が

いっぱいになりました。iPS細胞がそんなことにな
らないように祈りたい気持です。

レオポンの淋しき瞳冬の月